

<Rétrospectivité> in the Bergsonian notion of <durée>: After Jankélévitch and Merleau-Ponty

Ryu MURAKAMI

In this paper I will consider <rétrospectivité> as a positive element of the Bergsonian notion of <durée>.

Around 1930 Henri Bergson borrows from Vladimir Jankélévitch a concept of <illusion de rétrospectivité>, which means a lack of understanding about <durée>. However, his usage of the concept seems not to be true to Jankélévitch's, in that he regards <rétrospectivité> as a positive element of <durée>.

In my opinion, Bergson's infidelity to Jankélévitch, so to speak, is based on his interest in <histoire>, as far as the mysticism is concerned, which bears fruit in *The Two Sources of Morality and Religion* (1932). As regards this, Maurice Merleau-Ponty, who criticizes Bergson for his misunderstanding <histoire>, provides an important clue.

ベルクソンの「持続」における「回顧性」の契機

—— ジャンケレヴィッチ、メルロ＝ポンティを手がかりに ——

村 上 龍

本稿の目的は、「回顧性」という契機を、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) に固有の時間概念である「持続」の、肯定的＝実在的 (positif) な成分として捉えなおすことであり、また、ひいてはそのことをつうじ、彼の「持続」概念にあらためて光をあてることである。

ここで「回顧性」と言うとき、もちろん我々は、フランスの哲学者ウラジミール・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch, 1903-1985) によるベルクソン哲学の読解を念頭に置いている。ベルクソニズムの枠組みにおいては、「知性は生きた持続にたえず後れをとる」(H.B. 21) ことを宿命づけられていると言ってよいわけであるが、その知性が不可避免的に犯すことになる、「持続」の本性をめぐる誤認の在りようを、ジャンケレヴィッチは「回顧性の錯覚」(*ibid.*) と名づけたのであった。

ジャンケレヴィッチが自ら言及するように、この用語はその後、ベルクソン本人によって採用されることとなる¹。だが、我々のみるところでは、ベルクソンはこの用語を、「持続」への無理解をネガティブに強調するためというよりはむしろ、「持続」のポジティブな成分に着眼するために用いている節がある。ようするに、ベルクソンによる「回顧性の錯覚」の用法には、ジャンケレヴィッチの提案にたいする、独自にほどこされた創造的な解釈とも言うべき側面がみとめられるのである。

ここにみられる「創造性」は、ちょうどおなじ時期に刊行された、ベルクソ

¹ このあたりの経緯について、ベルクソンから届いた「1930年8月6日付の手紙」(H.B. 2) を論拠として挙げながら、ジャンケレヴィッチの述べるところは以下のとおりである。「我々が回顧性の錯覚の重要性を明らかにした […1928年に雑誌論文のかたちで発表された] 『ベルクソン』の先駆形態にあたる論考にひき続いて、1930年10月には、ベルクソン哲学の理解のために欠くことのできない論文「可能的なもの」と実在的なもの」が (スウェーデン語で) 発表されるが、じつは同年の初頭に、ベルクソンは我々の論考に触れていたのである」(*ibid.*)。

ンのさいごの主著『道徳と宗教の二源泉』（1932）（以下、『二源泉』と略記）の構想と不可分のものであったというのが、我々の考えである。この点を検証するうえで、『二源泉』における「歴史」概念の不在を指弾する、フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）の議論が、ただし、本人の意図を裏切る仕方によって、よい手がかりとなるであろう。

そういう次第で、本稿では以下、三人の哲学者のあいだを往還することになる。第1節では、1931年に刊行され、ベルクソン生誕100周年にあたる1959年に増補のうえ再版された、ジャンケレヴィッチの著作『アンリ・ベルクソン』に目をむけ、彼が提起するかぎりでの「回顧性の錯覚」の内実を確認する。つづく第2節では、ベルクソンの論集『思想と動くもの』（1934）の序論をひも解き、ベルクソンによる「回顧性の錯覚」の用法を検分する。そして、さいごに第3節で、ベルクソンがジャンケレヴィッチの提案に忠実でなかった所以を明らかにするべく、メルロ＝ポンティによるベルクソン批判が展開される二つの論考、すなわち、コレージュ・ド・フランス教授に就任するにあたって行われた講演『哲学をたたえて』（1953）と、ベルクソン生誕100周年を記念して開催された「ベルクソン会議」における口頭発表「生成するベルクソン」（1959）を俎上に挙げる。

以上の考察をつうじて明らかとなるのは、「呼びかけ」と「応答」の連鎖として「歴史」を構想するという、哲学的キャリアの晩期に（暗黙のうちにもせよ）育まれたベルクソンの問題意識が、自身の「持続」概念をあらためて照射する「回顧性の錯覚」という概念装置の用法に、大きく影をおとしているということである²。

第1節 「持続」への無理解としての「回顧性の錯覚」

ジャンケレヴィッチが「回顧性の錯覚」に論及するのは、ベルクソン哲学の枠組みにおいて、「物質的な現実（以下では、これを機械装置と呼ぼう）の平面でしか成功をおさめられない方法の、精神的な——心的ならびに生命的な——現実（以下、てみじかに有機体と呼ぼう）への、いたづらな拡張」（H.B.

² なお、本稿は、拙稿「『呼びかけ』と『応答』としての「歴史」——「歴史」概念をめぐるベルクソンとメルロ＝ポンティとの交差——」（『西日本哲学年報』、22号、2014年、37-51頁）の姉妹編ともいべき論考である。併せて参照されたい。

6-7) が厳しく戒められることを述べるくだりにおいてである。

「諸々の単純な「部品」で構成」される「機械装置」は、「寄せ集められた諸部分の有限な総和より以上のも」を持たないために、これにかんするかぎりでは、「アポ・ストイケイオン [要素からの] 構成」ないし「製作」は、「絶対的な合法性を有する」(H.B. 19)。

それにたいして、「相互に外在的な諸部分などというものがなく」、全体としての「有機体性が [有機体の] いたるところに現前する」、「独自の協奏的な統一」としての「有機体」は、「諸要素の総和と算術的に等しいわけではない」(H.B. 20)。したがって、「有機体」にかんするかぎりでは、相互に外在的な「諸要素」などというものは、「諸事物の論理的な文節にそって」事後的に「なされる、知性の純粹化志向の分析の果てに導出された」(H.B. 15)、「論理的な単純性」(H.B. 16) にすぎない。その意味で、じつはそれらは、「有機体」の創出の時系列のうえで、全体としての「有機体」に先行する「年代学的な単純性」(*ibid.*)というよりはむしろ、「具体的で実証的な諸事実から遠ざかることによって」(H.B. 17)、事後的に「始原的な全体から [...] 反省的に抽出される」(H.B. 15)、「抽象的な単純性」(H.B. 17) に他ならないのだとジャンケレヴィッチは言う。

それにもかかわらず、一般に「学理」なるものは、「有機体」の創出のプロセスまでをも、往々にして「製作」のモデルにそくして考え、「当の総合が見せかけのうえで回復する全体との関係において、真により小だとは言えない」はずの「諸要素」を、「総合の出発点」(H.B. 15)として位置づけてしまう。ジャンケレヴィッチが「回顧性の錯覚」と呼ぶのは、このような、「有機体」の創出に照準する場面で知性に宿命づけられた、「持続」の本性への無理解のことである。

製作のレシピにしたがって、創出の心理学をこしらえようと欲するやいなや [...] 回顧性の錯覚が現れる。じつにこの錯覚のせいで [...] 知らず知らずのうちに我々は、生命の方向を反転させ、終点が出発点にちがいない [...] と決めつけてしまうのである。回顧的錯覚の本領は、出来つつあるものから離れて、出来あがったあとの時点に身を置き、正当化のためのささやかな再構成——そのおかげで、あとからやってくる諸々の抽象的なものが、ただ単純で内容にとぼしいというだけで、始原的なものとなるであろう、そのような再構成——をア・ポステリオリに行うことに存する (H.B.

22)。

「心的ならびに生命的な」「現実」としての「有機体」の「創出」について考えるうえで、「製作のレシピ」を採用すること、すなわち、「持続」をつうじて「有機体」が「出来つつある」プロセスから目をそむけ、「出来あがったあとの時点に身を置」いて、じつは「あとからやってくる諸々の抽象的なもの」でしかない「単純」な諸要素を起点にプロセスを捏造すること、それこそが他ならぬ「回顧性の錯覚」なのだと言ケレヴィッチは言うのである。

第2節 「持続」の肯定的＝実在的な成分としての「回顧性」

ジャンケレヴィッチがいみじくも述べるように、「彼[ベルクソン]がさいしょに、回顧性の論理を体系的に意識するようになった」(H.B. 2) のは、『アンリ・ベルクソン』の3年後に公刊された論集『思想と動くもの』においてのことである。

論集の刊行にあたって加筆された序論において、ベルクソンは以下のように述べる。

それゆえ、創造的進化とみなされる持続においては、現実性のみならず可能性までもが、たえまなく創造されると言おう。[...] 音楽家が交響曲をつくるとき、彼の作品は、現実となるまえに可能だったのだろうか。現実化にさいして乗りこえがたい障碍がなかったという意味においてならば、それは正しい。だが、往々にしてひとは、この端的に否定的な言葉の意味から、知らず知らずのうちに肯定的な意味へと移り、およそ生じるものは総じて [...] 現実化に先だって先在するものとするのである (P.M. 13 : 1262-1263)。

「持続」をつうじて「現実化」されたものは往々にして、そこから翻って、「可能性」として「先在する」という意味において、「現実となるまえに可能だった」と考えられがちである。だが、ベルクソンによれば、これは「可能性」という言葉の濫用にすぎない。そして、「持続」をつうじて営まれる事象にかんずるこの種の「錯覚」を、「我々の知性に根づいた原理」(P.M. 14 : 1264)としての「回顧の論理」(P.M. 19 : 1267)に基づくものとして、ベルクソンは断罪するので

ある。

ここにみられる「回顧性の錯覚」の用法は、「出来つつあるもの」から目をそむけ「出来あがったあとの時点」に身を置くことに起因する、知性に宿命づけられた「持続」への無理解を問題視するかぎりでは、ジャンケレヴィッチの提案を適切に踏まえている。だが、可能性と現実性との関係という、おそらくはジャンケレヴィッチの念頭になかった論点を前景化させることによって、ベルクソンの議論は、ジャンケレヴィッチの設定した枠組みにはおさまりきらない膨らみを有することになったと思われる。

ジャンケレヴィッチに忠実にしたがうとき、事後的な「回顧性」は、「持続」にそくした営みの実態からかけ離れた捏造として、いかなる意味でも誤謬をしかもたらさない、端的に否定的な契機である。そして、ベルクソンの用法においても、なるほど「回顧性」は、「出来つつあるもの」に寄り添うロジックとは決してなりえない。しかしながら、「ひとたび生じた現実を、それに先だつ諸々の出来事やそれが生じた周辺の状態に結びつけることは、つねに可能である」(P.M. 15 : 1264) とベルクソン自身も言うとおりに、すくなくとも「出来あがったあとの時点」に身を置くかぎりでは、回顧的にふり返りみて得られる視野もまた、じつは逆説的にも、それなりに当をえたものであると言うべきではないか。実現された「現実性」がそっくりそのまま「可能性」として先在する、といった事態を翻って想定するのは言語道断だとしても、たとえば、「回顧性」のロジックにより翻って発見される、予兆や萌芽としての「可能性」の存在までをも、否定し去ることはできないだろう。だとすれば、ベルクソンの用法においては、「回顧性」の契機はむしろ、一定の事柄を自らの予兆たらしめるべく、現在が過去にたいして遡及的に働きかけることという、「持続」にそなわった肯定的＝実在的な成分として、読み替えられているとみるべきではないか。換言すれば、先の引用文の冒頭で言及されていた「可能性」の「創造」には、捏造の否定的な響きよりはむしろ、あるいはすくなくとも、それと併せて、実質的な創出という積極的なニュアンスをも汲みとるべきではないのか。

じっさい、他ならぬベルクソン自身が、上述のような着想を、「持続」をつうじて営まれた、過去の芸術史の展開に言及する文脈で披歴している。

今日では、19世紀のロマン主義を、古典主義者たちがすでに有していたロマン主義的な要素に結びつけることに、なんらの抵抗も感じられない。だが、古典主義のうちにあるロマン主義的な側面が引きだされたのは、ひ

とえに、ひとたび出現したロマン主義による回顧的な努力によるものである。[…] ロマン主義は古典主義にたいして回顧的に働きかけた […。…] つまり、自らの予兆を過去のうちに創造し、先行者らによって自身を説明したのである (P.M. 16 : 1265)。

「古典主義のうちに」「ロマン主義的な要素」が先存したというよりはむしろ、ロマン主義のほうこそが、「古典主義にたいして回顧的に働きかけ」ることによって、「自らの予兆を過去のうちに創造し」たのだとベルクソンは言い、しかも、彼はそのことを明らかに肯定的なトーンで語っている。してみると、やはりベルクソンは「回顧性」を、「持続」の肯定的＝実在的な成分として位置づけているように思われる。

第3節 「持続」における「呼びかけ」と「応答」

ジャンケレヴィッチとベルクソンとのあいだで、1930年前後の数年間に、「回顧性の錯覚」という用語をめぐる、いわば発展的な応酬が繰り返されたことを、我々はここまでみてきた。そのなかでベルクソンが発揮した「創造性」は、ちょうどその時期にベルクソンが育てていた問題意識と、より具体的には、神秘家の証言に依拠して神の問題にとり組んだ、1932年刊行のさいごの主著『二源泉』の構想と不可分のものであったろうと考えるのは、ごく妥当な推論だと思われる。

この点を検証するべく、本節では、『二源泉』における「歴史」概念の不在を指弾する、メルロ＝ポンティの議論に注目したい³。

1. ベルクソン哲学における「歴史」の不在？

ベルクソンのごとくに、「理論上は起源に存在していたはず」の「神的な人類」を措定するならば、「人間たちの共同的な生」ないし「歴史」はその外的な原理に還元されてしまうために、これを「自律的な」(E.P. 20) 運動として論じる視座が見失われてしまう。メルロ＝ポンティは『哲学をたたえて』において、そのようにしてベルクソンを批判する。

³ なお、本節で取り上げる問題については、註2に既出の拙稿「「呼びかけ」と「応答」としての「歴史」」において、すでに詳しく論じてある。

それでは、ベルクソンが見逃しているとされる「歴史」の「導きの糸」(ibid.)、すなわち、「歴史」を駆動する内的な原理とはいかなるものか。この点については、「生成するベルクソン」の次の一節をみよう。

だが、自らがなすことの別なる成就を他人や後継者たちに期待せねばならないということは、ものを書く人々、行動する人々、あるいは、公に生きる人々——つまりは、すべての受肉せる精神——にとつての残酷な掟である。[…] 意味は解体の危険をおかしてつくり直される [。…] 始まりが変身をとげ、成就される、そのような呼びかけ (appels) と応答 (réponses) との網の目 [。…] ベルクソンにおいては、「歴史に記入されること」の固有の価値もなければ、呼びかける世代や応答する世代といったものもない (S. 305-306)。

先行する世代が「呼びかけ」を発し、後続する世代は「応答」をかえす。ただし、「応答」がかならずや「呼びかけ」の意味を改変しつつ、これを「別なる成就」へと結実させるかぎりにおいて、「呼びかけ」と「応答」とのあいだの関係は連続的にして非連続的であり、半面ではむしろ「応答」のほうこそが、翻って「呼びかけ」を一定の「呼びかけ」たらしめるものである。メルロ＝ポンティの考えるところでは、ベルクソンの視角がとり逃がしてしまう「歴史」の内的原理とは、「呼びかけ」と「応答」との織りなすこうしたダイナミズムに他ならないのである。

2. ベルクソンのな (暗黙裡の) 「歴史」の構想

『二源泉』において、「神々を創りだす機械としての宇宙の本質的な機能が[…]成就されるための努力」(D.S. 338 : 1245)、すなわち、神秘家を介した神の愛の伝播を論じるさいに、じつはベルクソンも「呼びかけ」という用語を頻用している⁴。メルロ＝ポンティもそのことは承知しており、しかしながらそのうえで、「呼びかける世代や応答する世代といったもの」が『二源泉』にはないと彼は言い、「そこにはただ、個人から個人への英雄的な呼びかけがあるばかりだ」(S. 306) と断ずるのである。

だが、メルロ＝ポンティの批判を踏まえたうえで『二源泉』を読みなおすとき、

⁴ Cf. D.S. 30 : 1003, 67 : 1032, 85 : 1046, 333 : 1241.

むしろ他ならぬ「呼びかける世代や応答する世代といったもの」をこそ、我々はそこに透かし見ることができる⁵。

2-1. 神秘家の「呼びかけ」と人々の「応答」

神秘家による「呼びかけ」について述べる、次の一節をみよう。

彼〔偉大な神秘家〕の言葉が〔…〕我々のなかのあれこれの人のうちに反響を見いだすのは、じつは我々のうちにも、いまは眠っていただけ目覚める機会をまっている、そのような神秘家がいるからではないだろうか。〔…〕このとき、その人はある人格からの呼びかけ (l'appel) に答える (répond) のである (D.S. 102 : 1060) [.]

神秘家は「呼びかけ」を発し、人々が「応答」をかえす。注目すべきは、人々がそのようにして「応答」をかえすのは、彼らのうちに「いまは眠っていただけ目覚める機会をまっている、そのような神秘家がいる」かぎりにおいてのこととされている点である。つまり、「呼びかけ」「応答」は『二源泉』において、先行する神秘家が後続者を覚醒へと導く、そのような局面を記述するための用語として用いられているのである。

そして、先行者と後続者がとり結ぶこの神秘主義的な関係は、ベルクソンにとっても、文字どおり世代をまたぐものでありうる。というのも、ベルクソンはたとえば、「完全な神秘主義」の担い手と自らの考える「偉大なキリスト教神秘家たち」(D.S. 240 : 1168) について、彼らが「人類のなかに突然、現れた」などと「事柄をはなはだ単純化」(D.S. 251 : 1176) して思い描くことを戒めて、彼らが「福音書のキリスト」の「模倣者」もしくは「後継者」(D.S. 254 : 1179) であることをぬかりなく付言しているからであり、さらにはまた、当の「福音書のキリスト」自身についても、これを「イスラエルの預言者たちの後継者」(ibid.) と見做しているからである。

⁵ この点にかんしては、以下の拙稿もあわせて参照されたい。村上龍「創造性の伝播——ベルクソン美学への一視座——」、『美学』、57巻1号 (通算225号)、2006年、28-41頁。

2-2. 「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」

上の議論にたいしては、メルロ＝ポンティ的な視座から、以下のように反論することもできよう。なるほどベルクソンの「呼びかけ」「応答」が、そのようにして世代をまたぎうるものだと、しかしながら、神の愛の伝播がけっきょくのところで、理論のうえで起源に措定された「神的な人類」という外的な原理に還元されるかぎり、ベルクソンの言う「呼びかけ」「応答」は、メルロ＝ポンティ的な意味での逆説的な「友情」(P.D.M. 95)を育むことがないのではないか。換言すれば、目的論的とも形容されえようベルクソンの構図においては、「応答」はひたすら受動的たらざるをえず、「応答」がかえって「呼びかけ」のほうに働きかけるといふ、「歴史」特有のダイナミズムは、やはりとり逃されてしまうのではないか。

たしかにメルロ＝ポンティの言うように、ベルクソンは「神的な人類」が「理論上は存在していたにちがいない」(D.S. 253: 1178)と言ひ、神秘家たちのつむぎだす「呼びかけ」と「応答」の連鎖を、その実現のための過程として位置づけている。とはいえ、それでもなお、彼はこの過程をけって単線的なものとして思い描こうとはしていないし、さらには、そのように思いなしてはならないことを強調してさえているのである。

それら「完全な神秘主義に先だつさまざまな動向」も、産みだされたさいには、それぞれが完全な一幕だったのであり、それ自体で充足していた。それらはあくまで、現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力のおかげで、最終的な成功により不成功へと変えられてしまったときに、始まりや準備になってしまったのにすぎない(D.S. 229: 1159)。

神秘家が新たな神秘家を覚醒させゆく連鎖のなかでは、「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」が働くものである、すなわち、後続者は先行者からの「呼びかけ」を受動的に受けとるのではけってなく、「完全な一幕」だったはずの先行者にたいして自身の「始まりや準備」としての意味あいをあたえ、これを「不成功へと変え」ることにより、むしろ能動的に「応答」するものである。ベルクソンはそのように言うのである。だとすれば、『二源泉』には、まさにメルロ＝ポンティ的な意味での「歴史」の構想が、それとして言及されぬままに内包されてあるということにならう⁶。

以上のように、そこにおける「歴史」の不在をメルロ＝ポンティによって指弾された『二源泉』のうちには、じつはすぐれてメルロ＝ポンティ的な「歴史」の構想が垣間見える。我々にとって重要なのは、ベルクソンがそのような構想を披歴するさいに、「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」を強調している点である。この「力」は、『思想と動くもの』にそくして我々が先に確認した⁷、「持続」の肯定的＝実在的な成分としての「回顧性」にあたるものとみて間違いないだろう。してみると、本節の冒頭で提示した推論は、やはり妥当なものだったのである。ようするに、神秘家を介した神の愛の伝播を「呼びかけと応答との網の目」として表象しつつあった、1930年頃のベルクソンは、「持続」における「呼びかけ」「応答」の契機に、すなわち、「回顧性」の契機にあらためてフォーカスしていた。そして、彼のそうした問題意識が、ちょうどおなじ時期に、「持続」概念をあらためて照射するべくジャンケレヴィッチによって提出された、「回顧性の錯覚」という概念装置を解釈するうえで、バィアスとして働いたのである。

⁶ このような仕方での『二源泉』の読みなおしは、ある意味では、他ならぬメルロ＝ポンティ自身によって提言されていたとも言える。なぜならば、彼は『哲学をたたえて』において通りすがりに、いわゆる「回顧性の錯覚」を、「呼びかけ」と「応答」との織りなすダイナミズムへの着眼として読みかえることに同意しさえすれば、「ベルクソンもまた歴史の意味や進歩というものを認める」(E.P. 33) ことになるはずだと述べているからである。

⁷ 本稿第2節を参照されたい。

凡例

ベルクソン、ジャンケレヴィッチ、ならびに、メルロ＝ポンティの著作からの引用にさいしては、本文中で以下の略号とともに頁数を（ ）内に記す。ベルクソンの著作にかんしては、単行本の頁数のあとに著作集*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959^{1re})のそれを併記する。

Henri Bergson

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, P.U.F., 2008 (1932^{1re}).

P.M. : *La pensée et le mouvant*, P.U.F., 2009 (1934^{1re}).

Vladimir Jankélévitch

H.B. : *Henri Bergson*, P.U.F., 1989 (1959^{1re}).

Maurice Merleau-Ponty

E.P. : *Éloge de la philosophie*, Gallimard, 1953 et 1960.

S. : *Signes*, Gallimard, 1960.

P.D.M. : *La prose du monde*, Gallimard, 1969.